八代集抄

古今集四

貴
14
3163
104(6)

帝國圖書館

花かつみは かつみる人にといはんとて花かつみ
といひかけたり安積(アサカ)の沼にかつみといふ花あり 閼伽(?)ハ菰の事
花の咲るをいふ花かつみとはかつみる物の名ところだに
志らず伊勢にてハ芦をハ濱荻といひ掛を玉串といふみちのくにハ
菰(コモ)をかつみといふかつみをふきて五月五日にかけてとう
陸奥の国にまかりて志るハかつみをふきて優殺おもしろき
事なり都黄門院の根合に岩原孝善哥に あやめ草にひきて
とさゆくあ(?)ま根のいそかさの沼のあやめの根かな此哥金葉
集に入られたり如何但彼哥合にハかつみのねをまたハあやめ
しと申難ハ侍らずかつみの根まれおやめぐさ此哥合にとて
のよし日数へして恋根枯しえ不可ししとそやうり
ここにと申きたれされハ何にとみきとひすハ五月五日
かつまり行すやうもあるよしありて実方中将の花かつみ 藤原資信朝臣 実勤
ましくかつみあかりける事よろしくかつみのかつみの五月
五日五月あやめの事おやめぐさのかつみをあやまりさたりける

とやいふさておるつきさる
らずあさかの沼の花のか
つみとかくて見えし
とてかつみを来てお
くるはあやめなり かゝ
みをふく也と申古
の人の侍へるも
六条右府孫息皇
后宮亮信雅朝臣
陸奥の国にまかりて
下りて京に帰りて
はすえてかやこよひ待るる彼中将の陸奥をやまた
みゝ川をふりすやひかりすあらんとしてとる人ハかさをふきか
あをいにすやまりしけんと云室八所いふたのんかすとおもひしより
あ所か見えとるかしける程とりかくまてよは塩竈の浦

古今和歌集巻第十四

恋哥四

題しらず よみ人しらず

みちのくのあさかの沼の花かつみ
かつみる人にこひやわたらん

はひかへてハ恋しさ事しもなかり
をとみる人をまちくへりける

こゝろ猶のこりおもふらんとせんさいのこと
ゝもいとゞしくなりまさりてこゝろ
もとのかたへかへすもせんかたなくて
ゆめうつゝたゞこゝちにぞ
なんどのやうにわれながらもいかゞ
ありけんとおぼえ侍る

伊勢

ゆめうつゝたゞこゝちにぞ
わかなりけるいかにみる人
よみ人しらず

いまゆくすゑのたのしきかたのみ
がてこゝろのうちにおもふ事
いせのうみのおきつしほあひ
をえねどもあはれとぞ
こせのうみのおきつしほあひ
のやうにあはれとぞ

いづれもおなじこゝろなりまさりてこゝろ
もとのかたへかへすもせんかたなくて
ゆめうつゝたゞこゝちにぞ
なんどのやうにわれながらもいかゞ
ありけんとおぼえ侍る

伊勢

ゆめうつゝたゞこゝちにぞ
わかなりけるいかにみる人
よみ人しらず

いまゆくすゑのたのしきかたのみ
がてこゝろのうちにおもふ事
いせのうみのおきつしほあひ
をえねどもあはれとぞ
こせのうみのおきつしほあひ
のやうにあはれとぞ

いづれもおなじこゝろなりまさりてこゝろ
もとのかたへかへすもせんかたなくて
ゆめうつゝたゞこゝちにぞ
なんどのやうにわれながらもいかゞ
ありけんとおぼえ侍る

伊勢

ゆめうつゝたゞこゝちにぞ
わかなりけるいかにみる人
よみ人しらず

いまゆくすゑのたのしきかたのみ
がてこゝろのうちにおもふ事
いせのうみのおきつしほあひ
をえねどもあはれとぞ
こせのうみのおきつしほあひ
のやうにあはれとぞ

ゆきゑとくことハ海のことく[illegible]海藻魚貝をもとむるをいふ
春かすみかゝるひくい山の
霞にかくれ山桜を見れ
そもかくれぬこそくの
見ること
心をつかわさ[illegible]
かけるらん人の[illegible]
しく見れに[illegible]わ
[illegible]とか
もひねるとも
かれそてんのこと
枯果るるもかる[illegible]
[illegible]て[illegible]の
こく[illegible]人を[illegible]
[illegible]

よしのり

春かすみかゝるひくい山のさくら花
見まくもかくれぬまに見るかな

ふかやふ

心をつかわなきとのとふひねる
見るものゝやこひしき
おりからちのみつね
かれそてんはをいふて[illegible]の
かくとも人のおもひ[illegible]

志ける心
あすか川ふちハ瀬
[illegible]川の[illegible]
なかる世なりとも
我[illegible]
いまてまさとこ
おりふしの[illegible]
[illegible]の[illegible]
ハ秋を[illegible]
[illegible]人の心ハかわり
[illegible]秋を
[illegible]
飽[illegible]
さとりなる[illegible]
世ハさ[illegible]
[illegible]

よみ人しらす

あすか川ふちハせになる世なりとも
おもひそめてん人ハわすれし

寛平御時きさいの宮の歌合の哥

おりふしのこの葉乃みや秋をとく
いろもかはらぬ松はいかならん

紀よしもと

さとりなる秋てきことひとや
[illegible]のうち[illegible]乃[illegible]ひめ

又ハうちの[illegible]ひめ

宇治乃橋姫の我を神とこそ人をうらめ
ことわりやとおもふ事をうさはれ
姫大明神とてあがめ奉る神をうやまひ
する離宮とて神乃なりの事
大明神乃うちの橋姫うかれひ
又橋姫ともよめる古今をとのこと
不可用く事也伊勢物語
とるをとうとてを
君やこん我やゆくの　きみやこん我やゆくの乃こさとひな
君やこむるさ我や　きみやこむるさ乃板戸とさすねなく
ゆくとなりのやす　ゆくとなりのやす
らひなどをいさ　らひなどをいさ
すねもとくいさよひの月こそ不知夜と出物頭ともく

いもうとのこと
今うんとひく人
と月比なれとも
新も著月ときめる
よ成ねとうよみ給
久ん事毎念ずる
事心

うせい法師

いもうとこいつ
何里あなた乃月

月著ら著ア
こてみうう
月西日ア著ら乃

よみ人しらず

ときやらと告や賤人を待とはなけれ
しもはやすと云月著ア八ツ月著ア
こハ如月もく閑りよき也こてみる
百葉に我著乃梅咲ますと告やらハこ
山寺を本とせるうこ

きみをおもひかねや　きみこ
移香まくわをを　わらこと
ゆひもまきくさも　書いをくこと
をこすに園にいて　みやまの
頃んをもやさし淺　小萩露をも
うゑ置しこゝろざし　きみをこそまもるべく
きいを洗ふ男　そゝ磨
乃もとをもとめるをとゆいと　紫の条の条そよぐ〳〵え服乃ときく
紫乃神をとのひともいふ女乃等（カヒナ）と　すると云そしも男のえ服乃
やうりをとをかをと　叙子（カラヒ）をさして額（ヌカ）を取をもち
みやきのことゝ何ぞ乃　主謀野乃ごとき（ソヽノカ）磨童（マヨ）
くさ〳〵風を待こゝろ　ゑをもつとゝ何乃小萩し
古枝より出をふと　秋花さくと本萩とゐみを中う
大ぶ何ることもちいさきを　小萩とはよめりをとあるの松と
いつもはかり榊い他のあり　来ゐ〳〵きと云（イヒテラヒ）あるく　那須家

何をこゝろ　何おこゝろ
山乃の垣根よ咲る　山乃の垣根よ咲る
やまと撫子の　やまと撫子の
に今もさかりと　花さかりと
秋乃人をまつ〳〵以　花乃人をまつ〳〵以
里も大和撫子唐撫子　里も大和撫子唐撫子
そこはかとなる　そこはかとなる
ゐるさ山乃はいやしき民さ　ゐるさ山乃はいやしき民さ
花のあのあたりをす名ゐ　花のあのあたりをす名ゐ
そゐゐまりきとゝ那須とい　そゐゐまりきとゝ那須とい
乃とそとゐ那須やう云　乃とそとゐ那須やう云

恒穂と云只恒と

ゆき

ゆき

ゆき

ゆき

誰まことしくくるむつゝきそうけつまと

秋のせそうやまれ　素性法師
秋風のまきの
うつろひゆくそ
人のやもうろう
ゆふまと

せみのこゑきけい　寛平御時きさいの宮の歌合
人のやれうすゝや　秋
ゐんとさくへ蝉の　友則
こゑをきけい誰
くそまとし名衣
いうすゝやといふ
とめし歌
うつせこれ世の人を
世の人のおつひさう

わすれぬるものくかれぬてうまり
ねのくうをしふのちのわすれうれあめ
うをしうまいとこうはせといふ
むさゝ井のそのまゝ
人こと乃きけ、
まそとい人の上いつるものきけ
ねのそこうつもん　ねのぬうちの中いさうれてそれを
しふ乃ちのうみうせんとこうをしまいそれをまもなって
別せうをさほのうい出るうちいとれうこうりせんとこれうこと
いとれうをやうくいひてけうり出れうさ
さ河の形人の空　彩を衣なの
せそもの山々せ本哥をそうそ

わすれなんとおもふ心のあるさまを
見れんとて
わすれなん我を恨みん
行すゑまつ人のあきの
うらみをもよあ
ぬさもとりあへすゆく川なかれ
よわたらんと
思ふ心
山寺なる人のいそくおうごえの
中納言主殿九子
おつまひとうたうたひ
ゆくすゑのたのもしき
ゆくすゑをみんことを
わかれをしむ
こころあるものをと
中臣東人
帝主

よと川のながれもとゞめかねてうたひ
あかつきとおもふ心あるをとこ
ともあまたいでていぬ
うこひなき
山ほと乃ほさ
行よ
降く
うちよりかへり
神心に
みちきこ
それをおもふ
紅乃神
くらもちの
山川乃
春夫
をわれに
こゝ神
素性法師
春雨の
降く里ゆ
うこひなき
何さ
なりぬ
行原
みちの

くさり日の歌とし
我ハ思ひ日比ハ歌乃
こゝろ人の身にハ見え
えねども思ふ男とハ
まされすとも人々ハ
歌とハ秘めたり居
男も何事も人を
そえを見んねこと
名をもらすことなき人々
名なき我心を人々
思ひやりわかりける人
しとハ更に覚ぬとや 口訣
めづらしき人を見んとや
志らも世ねハとぞや
まもせぬ人りける

志も深けのしもとは 下野 雅宗

くさり日乃歌よし あれる我されハ
やぶさうえてね男をいえされす

清ゆき

ちもあきこゝろを人々ぞやおわ
うけるかんとしおゆれてふ

よみ人志らず

めづらしき人を見んとや志らもせね
わり志きひもろとけわするゝん
うけるよ乃られ行わりまる事の

あふ時ハ下ひものとく　みる日とあまたハ紐のねまとへる
ことのは
かけてぞ思ひそれぬ行ねば　おほえにてをあしと舟こぎかへり
みえのとしゆひてある　おもしひとふやとひわするらん
ときなくあともらて
よしあし見ても袴きあまのあそれぬ行れのとき思んそくかけそ舟のとてし
そのよ詩にも天外遊絲或有無と呼り野馬と糸系とハおぼし掲も野馬
とかけてとはかりにをとはせむとくむすめとハとものそれゆ行れるえらね
ともむつかしそれれ雅わすると 雅俗宜
かりにらくるるし 堀江にちいさき舟ハいつもひとつ同し江にとり
かけるとまくらくかみし人を恋わするゝ 棚無小舟とハちいさき舟也
大船のみすはて舟のたなのうへに張乃やうなる板をかけさる
せいひとも堀江ハ津の国の行の難波堀江と云 難波江とも割
かりにといふ 難波の堀入なる
堀江乃門ともよめり 雅俗宜

伊勢

わらうことおびただしく海乃こうこつくして甚だ深とこそ拂ひこれんとそ拂ひて神のねまんとこ海いせ乃おうれ云わらうこと四なへ立なれわらうことをもりあひ口訣「みへ」とりあをゝ人乃這ゝき海ゴドおこれせをねそうまゝ拂ひきるもをれと礼告ふ云乃ゝ

わらうこと
海乃こうこつくして
甚だ深とこそ拂ひ
これんとそ拂ひて神や
神のねまんとこ海
いせ乃おうれ云
わらうこと四なへ立
なれわらうことをもり
あひ口訣
「みへ」とりあをゝ
人乃這ゝき海
おこれせをねそ
うまゝ拂ひきる
もをれと礼
告ふ云乃ゝ

大伴乃家持

おもひやるかすみへだてゝ遠つ山こゑもきこえず初春乃あまつそらなる

遠つ山こゑもきこえず初春乃
あまつそらなる

右乃ゝ哥ハ遠ゝ山こゑもきこえずとよめるハ都乃ゝ方乃ゝ人乃音づれもきこえぬ心をおもひやりてよめるなり

右乃ゝ哥ハ遠ゝ山こゑもきこえず
とよめるハ都乃ゝ方乃ゝ人乃音づれ
もきこえぬ心をおもひやりてよめる
なり

このめるうめの花をよめる

このめるうめの花をよめる

ふるさとの梅乃ゝ花をよめる

ふるさとの梅乃ゝ花をよめる

典侍藤原朝臣

典侍藤原朝臣

ふるさとの梅乃ゝ花ハいかゞみるらん

ふるさとの梅乃ゝ花ハいかゞみるらん
われ乃ゝみるにさへこゝろ乃ゝとまるなり

われ乃ゝみるにさへこゝろ乃ゝとまるなり

近院右大臣（コンノ）

近院右大臣

家乃ゝ梅をよめる

家乃ゝ梅をよめる

春乃ゝ雨乃ゝふるにつけてもうめ乃ゝ花乃ゝ香乃ゝ
なつかしきをよめる

春乃ゝ雨乃ゝふるにつけてもうめ乃ゝ花乃ゝ香乃ゝ
なつかしきをよめる

紀乃ゝ貫之

紀乃ゝ貫之

春乃ゝ雨乃ゝふるにつけてもうめ乃ゝ花乃ゝ香乃ゝ
なつかしきをよめる

春乃ゝ雨乃ゝふるにつけてもうめ乃ゝ花乃ゝ香乃ゝ
なつかしきをよめる

紀乃ゝ貫之

紀乃ゝ貫之

伊勢物語のうた

題しらず

みかの原わきて流るゝいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ

月やはるの春やむかしの
月ならぬ春やむかしの
ものやおもふと
我身ひとつの秋の風
月やあらぬ春や昔の
我身ひとつの
身のうへよりそ
よみ人しらず
我のみやあきを
かなしき人を
わすれなむ
我をまつらん
人もこそあれ
ひとりむすめる
在原業平朝臣

月やあらぬ春やむかしの
ものやおもふと
我身ひとつの秋の風
月やあらぬ春や昔の
我身ひとつの
身のうへよりそ
よみ人しらず
我のみやあきを
かなしき人を
わすれなむ
我をまつらん
人もこそあれ
ひとりむすめる
在原業平朝臣

仲平朝臣左衛門督基経
君こふる涙しなくは
我恋ふる涙しなくは
あかずして
我こそ先に
あかずして
我こそ先に
人を恨みん
人をうらみん
九條内大臣
我門に
きてとふ人を
きりもあへぬ
我門に
きてとふ人を
きりもあへぬ
よみ人しらず
我こそ
まさ木の葉に
我こそ
まさ木の葉に
あらめ
あらめ
世のうきもつらきも
世のうきもつらきも

ひさかたの月のかつらとは
えのれいかとを
くるまさへすくも秘
経とあるまゝ人の家
よりれはまるすと
おけくらし

ひさかたの月乃桂も秋はなほ
人のよそほひをりふへてある

読人しらす

みくらしはたちもみちれは
あるすを人をてふ唐ふあり

きのとものり

めれとなへされは
さけくのやすてむ
つまくするとへ人を
てふへきこし人を
世の人口訣

雪もよしあくをまちる翁乃我かわかや
雪もなおまきる
秘密は家にしれく
世をへわするし
いとゝれくの千世をはへわるん
披厭を家陪てりうてまりてにかれてとゆへ

とて雪もちるとかへり翁はあさるまかれたる海乃みくとこ
は風ふりて浪のきゝねを翁ゝきゝなきすと和乃字とくく
花かたみめならぶ人のあまたあれは
ふ人を見るき人れ
は数まちね我身は
忘られぬらんとも
かたみの国れかり
るらく数多れ人
をみくれまゝ人の我そ
忘られぬらんとて花
かたみ 筐 箸云々
花もしなみて浮ゝ世は浮め乃国はおかくる縁をれはやすくて云
うきめのみおひて
わかうきめを見るをかりうめまゝ人のさひかると
いへんとて浮和布海ゝ
浦にかりにうちよるとなり

よみ人しらす

花かたみめならふ人のあまたあれは
わすられぬらんかすならぬ身は

うきめのみおひてなかるゝ浦なれは
かりにのみこそあまはよるらめ

伊勢

いひふあひてねさみ
ねこつみ神なやそる
月さへれまひて
洞なめそ歌り
ひとそこ洞をい
それと月さめる
るるるとみな
てきそもめそ
歌るまさ訪し
私そてそ宮い
私こそ宮いそよ
私そのねはそ宮いねこめ乃松乃志そわそ
すれおまの志かやさ每そ乃るをよ眠そまま
雲の志ゆそ衣はさ乃行乃
るをこひ夜の姫そそ

作人志そそ

私あそそ白雲い神そそ
わそそまそ乃志先そりわ
するあおれ志ねやさ衣おさと志乃
ま乃やきまさね
ま乃志ゆそ絹布そそ

おさとい物を隣(ナカ)と去間遠(トヲ)とい
い垣柿 衣い当そ乃をそ
まをきさをめ乃志
山志乃乃そそのわそ
低物(ヒキ)こね人を牡鹿
いるまさとその葉(モミ)わ
多時いそねれ
ハ加わりまこれと
よす 別し家
いひよねこひそう
るるまさこひとねはり
ひ沸そ神そ亦
乃志まさ
あそそと 最(イト)
あそつき乃志まの
ま乃やそるそと 時(トキ)とい

みる心
こぬ人をまつ夕暮
新古今恋撰没
いとゞわびしさの人
乃さびしさにぬなめ
暮れ松風の言葉
此本歌より出たること
この歌六百番歌合の時よみて俊成卿もめでられたる自讃歌十首乃中にも出され定家ハ一分乃
あるうこと
物なりけり
久しくもなりにけるかな
とこなりにけり
住吉乃松をひさしと
待わびてぞも
すみ乃江れまつの程

こぬ人をまつ夕暮乃秋風ハ
いかにふけばかわびしかるらん
久しくもなりにけるかな住乃江の
まつハくるしき物にぞありける
久しくもなき人をまつハくるしき物と
すみ乃江のまつをひさしく成ぬれハ
かねみのおほきみ

待つこねかりの
久しくなれハなり出
見しそとしてまつ松
を待かりつ（あし鶴の
ねになくとうてか
みよし乃山ハ待えん
年ふるも君まつ人
をまつよし名れハ三
輪の山もいかにまつ
ひさしきことをも
わか庵ハ三輪の山本
恋しくハとふらひ
きませ杉たてる門
とふを本歌とせり 古今集 誹諧歌
ぬるもまたれんとまつ我なるらん 伊勢集

阿したづ乃ねになかぬ日ハなし
なりひら乃朝臣何ひしかて
待わびるとかれぬに成ぬなれ
ちくやまの心まは待てくる
ましへすゝるともにゆくなり
きくなる
伊勢
みよし乃山いかにまたれん人も
まつ[illegible]とかしともへ
[illegible]とゆかのまつ山よの
[illegible]

雲林院乃そ
吹きまよふ野風を
秋萩のこころ人乃
折うけひとを
也吹きみだりつゝ
思ひのまゝの音琴
まことこそ我身何事
と人我身乃
の秋さへかりねれ
時雨にかりねれ
つゝうみをいさ
めし
人をおもふ心まかせ
我ふこころのまゝ
ならいう風のまゝ

雲林院乃そ　貞樹従五位下名虫子

小野さゝき

むすめふみけるとうもろ
ならう乃あいこひるそ
きくふまりに神乃のこれい
よみてたてまつる

あまつ天乃ことよふにも人乃ちゆく
のとこめあてしありら
らうにちるとうえ
こそて天乃とふ風乃
乃そとも風とそ

ゆきうちそゝふの
女乃葉草を天乃
こゝろ乃ふかきにや
かこをよろみてしるふ風のそけれ

ゆきかうそゝふの今
わうかるやまれをや今
ありひとの名乃

雲ハ風によりてかハるぬ拙之風のまやきとハこと人の心に思をよせて云と
也一説ニ御山に風のたやさりてり雲の志けくりぬやうに
女のこゝろ又人にうつるを成ゆくやうにはかなく絶
玉くりハ何ま雲のとありゆきかりとしても思はかく
そらくみらすやとはふハすこし雲の心をまもかに集とも拙くとかりく
るす集よゆきそりと成るハ心よそ行るまや
かゝ衣それハ男に
人のあるらん
男によるつれてきさ
しらうかゝるかれく
に恋ひかけて絵之に
ハおつさしとかゝる
衣ハそれとつらんに
めかけてと衣裳に
そつてそり

題志らす
かゝ衣あれハ男にうちまつれめ
かけのかれおもひさへ
うけくのみやハこひんとこそしも
とものり
秋風に男をわけてもふりあらに
ひとのこゝろのうちもあるらん

秋風に男をわけてもかハぬまあと人の心ハ
変りハすらんとの秋風を飽りとせしく心よりをまて我をとも
よそよそに 口訣
流まりも咲く成ゆく
つまにすくなかりし人
乃ミ契ハ秋の末
ねさゝまにさゝる
とこ
志て乃山にゆきと
つきぬ人にかゝき
ようきよのねさ
それハ四よ此山と先
こしとそて麓ま
てゆきくちかさ
なとなり女の家

源宗于朝臣
流まりもなく成ゆく人乃ミの契り
秋よりさきにちりまかるる
心ちうこまつりかる跡あひ知く侍
るる人乃もとにて思ひとそよみて
のちとふ人かるれハよみてつの
かはるる
参議 菅原高経女
志くく乃山かゆきとをとりんてこう帰かみし

かいそくるまさを
一説つきと人を雲
雅いこしそ功
くるうしつきと
こいつと我うと人
ちかをゐ次也

つるくかれゆく
春萌出る五乃
秋乃きこを秋ゆ
く小野の浅茅ふ
我をそくくに
ゐひかなゆる
とし幡くる事也

はるくる
いまちうなね
おもひくるに拙くまりけ
おろふ野火のもしくるを
みるくよめる 伊勢

をゐ野へと
乃野へと我方を
神方とおりくゐ
きそくてをまを
約きそとさまを
まちくるも歌くる
き心まり
乃おに托きて
うき多のう我わ
妻托歌きそる
の浅い沈そうきと
いうんそそく

今世川ありてゐまくる
行くそとおりきゆまりを
教むと

よし乃川よしや
よし人こそつらく
ともわれはあひし
まつハ忘れしとぞ
吉野川ハよしやと
いはんとてなり
むすめし
世乃中は人の心ハ
花染のうつろひやすき
きものなれハ世の
中の人の心ハ乱とぞ
心こそうつろひけれ
我心うつらずして
何事もかはらぬ
つらきハ物はかなき

みつね
よし乃川よしや人こそつらからめ
はやくいひてしことハ忘れし
よみ人しらず
世乃中は人の心は花そめの
うつろひやすきいろにそありける
心こそうつろふ物なれ深きハ
うつろふ事もしらすや
こまち
いろみえてうつろふ物ハ世の中の

さみとこそいひけれ
とうめてしきりとも
いろみえてうつろふハ
五条の后にて清濁あり
読ミ口訣
我のみや世をうく
人の心の花と散なハ
うハ我のミ世を憂き
と鳴侘ずして営
うちに世をうき世を
営といふハ我心と云
折ふしもかれなん人を
我いはふちにも離る
人ハせんかたなけれハ
何そ我ひとりせんと

ひとのこころの花にそありける
読人不知
我のみや世をうくひすと鳴侘ん
人乃こころ乃花とちりなハ
うせい法師
折ふしハ花をもみせん人をいとひせん
何かすちきねる花とうらめ
よみひとしらず
いまはとて君かかれなハ我やどの
花をはひとりみてやしのはん

いまゝでとく君がわすれなんだハ今ハと君まずハ霜がおいたであらう
あるやうにいりつけをひとつやかいさうにこいしいもんぞ
わすれ草かれもや
霜かりハ草のうへに
あれハ人の心に忘草
もかれもやせんかう
霜をおけりとも
忘草のうへハ忘
れねバぞといふて
まことハそさハはある
わすれ草のたねハ
何ぞと思ひし
につれなくこゝを
しげなき人の心で
てありけるまへ

むねゆきの朝臣

わすれ草かれもやすると
ひと乃こゝろに霜をおかなん

寛平御時御屏風に歌かゝせ
おほせらる時よみてかきける

そせい法師

わすれ草なにをかたねとおもひしハ
つれなき人乃こゝろなりけり

秋乃田のいねでハないよ
人をいねといふ事
もうけていはねば
何をうきことで
かれくするぞと
稲を人をいね
とはうて刈を
離るゝのでござる
初かり乃なきこそ
世中乃人の心の秋の
うさに初かりのごと
く鳴わたるとも鳴
何とゆんで初
雁も秋の頃にきこ
何ぞれともうしとも

題しらず

秋乃田のいねてふこともかけなくに
何をうしとか人のかるらん

き乃つらゆき

初かり乃なきこそわたれ世中の
ひと乃心の秋しうけれハ

よみ人しらず

あはれともうしとも物をおもふとき
なとか涙のいとなかるらん

をとなさるゝことだとや思ふてござるしやら

[illegible]
[illegible]
[illegible]

もえいでわたる　味
それをしるしに
人乃きくにいふことを
きくみとをしに
みよとをそふるそ
もの高小路　作者
哥の家口訣
何ものもいはぬ
人乃言つまこと
さふらふかそれと
も無ものの
始めはり
俺をつるさきさ
何ものもいはぬ
人の名果
何ものもいはぬ
なそうきみ

よみ人しらず

我やとを
人乃とはぬ
俺をつる
いつことを
人乃言つまこと
も無ものの

哥原おきなせ

うつせみもうまれ
人乃なくのちハ
うたゆる
ゆふされハ人をまつ
久ハ
て人のまるさ
るの人しまね
もろのわやハ
歌くんさめとこれ
るわかやとこ
わうたわかやとこ
雲乃つきすよよせくる
ハるとこ又わかこすハ

うつせみもうまれ
人乃なくのちハ
うたゆる
ゆふされハ人をまつ
久ハ
て人のまるさ
るの人しまね
もろのわやハ
歌くんさめとこれ
るわかやとこ
わうたわかやとこ
雲乃つきすよよせくる
ハるとこ又わかこすハ

云かいるとこく人ひとかたの行きぬる時ハゆかりの人まて皆心のうつりか
ねるもの也秋風を飽きて人へむさし野といひ一ことゆへの心付るも 歌詠之義
秋風にあふ小田の子
稲の世にまた田の実
のつくねかよせく
年わかくて我身も
あくしあるもの八
此世さし田の実を
頼みてのこしれ
こよひも行われれ
八むなしきと思也
行き風のふきうら
葛の中に葛の葉八
こと風に裏見
する故それ八我ら

秋風にあふたのみこそかなしけれわか身むなしくなりぬとおもへハ　小町

秋風の吹うらかへすくすの葉のうらみても猶うらめしきかな　平さたふん

秋といへハよそにそ聞しあた人の我をふるせる名にこそ有けれ　讀人しらす

云心人の行きくるを恨ても猶うらめしかりてよめり 歌詠之義
秋といへハよそに聞し 歌詠 あた人とハ心うつりゆく人を秋をいとひてつき
せるハ秋をあきといふかけて秋をよそにきゝつる
名にこそ有けれわか身ふるされたる事を
わすらるゝ身をうち
我忘られし身の
うち橋の中絶て人もかよ
はぬ年をへしに守
宇治橋の中絶るといふよ
せしより國史云孝徳
天皇御時大化二年道昭和尚始造宇治橋ト大化二年より延
喜の時まて二百三十餘年をへたり
あふことをなからの
橋のなからへ
て恋わたるまに年

わすらるゝ身をうち橋の中絶て人もかよはぬ年そへにける
又ハこなたかなたに人もかよはすと

あふことをなからの橋のなからへてこひわたるまに年そへにける　坂上是則

へぬるとし梅よりすこしわろきものなり

うまさかの〳〵けわるく（ママ）

うまさかの〳〵活ある活

うもあんかの〳〵てり

うまさかの〳〵けわるくてもあんかのこと

あるきあいとこ流れ

ていきの〳〵てこ（ママ）陸の孤

今り

おうまてい（ママ）もせ

（ママ）男女乃中おの〳〵て

よきこのかれこ陽

あくまでさ中も別離乃さうつなもく〳〵此妹背山の中

うさこ吉野川の流れ流く〳〵浅深

なきもも脩（ママ）なきをとや世の中と観念をいかする

まこハ高乃郡社こちのよ山号をいかする

うまさかの〳〵けわるくてもあんかの

ものり

うまさかの〳〵けわるくてもあんかの

おうまてい（ママ）もせ

よみ人もつくす

おうれ〳〵こ流れぬ男い

かの〳〵川乃ようや世乃中

紀伊乃国名所図会巻之四

妹背山

妹背山ハ紀伊国ろ川と云乃川上乃山ニあり

妹乃山背乃山ハ相むかひてそひたつ

背乃山ハ高さ二百丈ばかりあり

紀伊国ろ川ハ山乃ふもとを流れ

わかやまニ於我ひゆ井ハ川上ニあり

おなもむろすくなの命ハ大己貴（オホナムチ）命乃御子

今むとひの神乃流れ也

ろ川ハ日本紀ニ名ハ見えねとも

哀傷歌

いとゞ乃今もうかるゝ時よりけ

れ　　小野小町

あくる夜の月待つ門にきく人も

なくて今夜あけぬるかな

志仁公　貞観十年十月崩薨

ちきり乃おもひしおもひしらぬ

を白川乃ちよをへぬるも

哀よめる　　そせい法師

ちきり乃ありきしおもひ

あくる夜の月待つ門にきく人も

なくて今夜あけぬるかな

志仁公　貞観十年十月崩薨

ちきり乃おもひしおもひしらぬ

を白川乃ちよをへぬるも

哀よめる　　そせい法師

忠仁公也延喜の比
太政大臣只二人也仍
雖不経官人前と
云おほせのよし
ちるなるをさはちてかり
忠仁公白河殿ハ上の
法勝寺也白河ニ住
玉ふ別を歎く人の
血の涙乃紅なれハ
てきたれハ白河と云
名ハ君か世にあるほどこそ名なれ今ハ紅なりと血乃なみた
八本名也河をかはるとあらぬれハ涙のつきて血となりて韓子ニ云和氏
真璞哭楚山下三日三夜泣涙尽継之以血と和氏か歌
うつせみハからを　元蟬ハ空なるからを見つゝも慰めて
なき人を名のとのこりてこそのみえぬハ夫ハせめて深草山乃煙たに

きみか世まての名にこそありけれ

堀河乃太政大臣（昭宣公寛平三年正月十三日薨年五十六）身まかりにける時
みかさ乃山におさめてのちよ
よみける　僧都勝延
うつせみハからを見つゝも慰めつ
ふかくさのやまけふりたにたて

こゝろなくとも見えすさん
ふかくさの野の
ほとりにまかりたまふ桜ハ
何とあるへきとて
心あらハことしはかり
なる事ハ墨染
にさけと花にいふ
むかひてなり
ねても見ゆねても
ねて見ゆるかり
またハおほかたハ
うつせみの世の
人の世ハとある世
夢にハあることなり

上野岑雄
かんつけのみねを
ふかくさ乃のへの桜し心あらハ
ことしはかりハすみそめにさけ
藤原敏行朝臣乃身まかりにける
時によみてかの家につかはし
ける
きのとものり
ねても見ゆねても見えけりおほかたハ
うつせみ乃世そ夢にハありける
あひしれりける人乃身まかり

かれこれ云ひくらべやうやうそのひかずも
おもひきかすみの
仁明天皇崩御を悲
みの谷まで乃ぞとの御国忌の日
の谷よ氣つゝ照月
よめる　　みんや乃やすひて
乃雪ーとみそれ
ちまさりてる日の雪
天下そやこゝろ
ーとよの空
天子を目かとく
まいこ御幸よかさね
まる故よ御幸のを
とゝゝ帝北く
ルまと畏悲も
山の庭ともいふて
を庭の谷と云ひや

元人頭右近少将
良峯宗貞遍昭
乃僧名
叙爵とて従五位
下にのぼる五
位ハ赤衣をきる
六人ハ元の衣り
六人ハ叙爵して
元の衣よりねり
我ハ世を背きさ
る云の袖よかる
ふぜよせめて用
のひと世のまうと

僧正遍昭

かりおろすくろの衣乃
六人ハ元乃衣りねり
六人ハ叙爵して元乃衣よりねり
我ハ世を背きさる云の袖よかるふぜよ
河原乃おいまうちまち
の男まうての私の家れ
とりをおりくるふ

仁明崩御の時世をのかれ
おもらす二帝につかへ
すひえの山にのぼりて
出家して慈覚大師の
弟子となりて遍照と
いふ
うちつけにさびしく
あらぬくもぬしなき
宿はいろのなきやう
にみえしやとて詠
まくしておもなきもの
ものゝうせて跡の秋
こゝに哀なる心を
うちつけは打てつけの意
かくきこえずけしきて

まだふかくもならざりける
を見てかの家によみていれ
たりける
近院右大臣
うちつけにさびしくもあるかもみぢばも
ぬしなきやどはいろなかりけり
藤原たかつねの朝臣の身まかり（内蔵頭左中弁右兵衛督正四位下 寛平五年五十九卒）
ての又の年の夏ほとゝぎすのなき
けるをききてよめる
貫之
ほとゝぎすけさなくこゑにおどろけば

郭公の鳴こゑにおどろき
てとおもひて君に
別れし時を思ひ出
しける也
花よりも人こそあだなる
花も人もはかなけれ
こそ人はあだなれいづれを
さきに恋んとこそ
思ひけめ思ひの
外に花よりも人
とげてはかなれと
也伊勢物語にも葉
解とこそあり一説に
説花のはかなきを
花と人とをいふ也

きみにわかれしときにぞありける
桜をうゑてありけるにやうやく
花さきぬべき時にかのうゑける
人身まかりにければその花を
見てよめる　紀もちゆき（望行）
花よりも人こそあだになりにけれ
いづれをさきにこひんとか見し
あるじ身まかりにける人の家
の梅の花を見てよめる
貫之

おこれ人乃哥うまわるまよ
ま女俄まやまいをさくくとよつく
成にるる時よの手をきてく勇ま
切わまるる　よ手人去てす
き庵よ雲う独こ鳥をてふきてわるまむれ
ぬまきるのをくとろりぬんまき手う逃てき
やまいなわつてい結るる秋こて
ちのこのをけるくわれ
よまくく人のをとかはうつる

大江為里

ふをゝを風う
露うをくる露
とるるうわもる
まき金まてく
露とをてくる
我君も露のの
れ公よねうれる
斗めうれる
まき多かて
露をの生くる
わとてひくと
作ぬまゆくをる
山あきのまて笑
已公をりてとふ
従いふ用共うわる

惟轄陰奥雪
萩原これり

露をとてくまるおとこいんん
わうる多もまうねもわを
やまひくよつく成まる
時ふよめる　おてひうの新古
ぬふゆくをこいうひくゆくとを
ふくふとこをまわてを